

## トピックス

## リベラル教育の〈効用〉

—J.H. ニューマン再読—

京都学園大学 バイオ環境学部教授 竹熊耕一

## 1. 「リベラル教育」の変貌

これまで2回、2013年（第14号）、2014年（第15号）とこの誌面を借りて、欧米の大学教育の理念的な柱である「リベラル教育」の歴史を瞥見した。

第15号では、アメリカ合衆国最大の大学連合組織である「全米カレッジ・大学協会」（Association of American Colleges and Universities, 略称 AAC & U）が現在全土に展開しているキャンペーン、“Liberal Education and America’s Promise”（略称 LEAP, 2005年スタート）を取り上げ、今世紀初頭より顕著となった「リベラル教育」の再定義の試み、そしてそれを機軸とした教育改革運動の概要を紹介した<sup>1</sup>。その骨子は以下のようなものである。

AAC & U はもともと「リベラル教育」の普及と確立を使命として1世紀前に創設（1915年）された組織である。LEAPは、そうした伝統を背負う機関があえて「リベラル教育」の刷新を掲げ、古代ギリシア以来のその理念——学術性と人格陶冶を目的とし、実用的・技術的な職業教育とは一線を画す——を抜本的に改変しようとする注目すべき運動である。LEAPが描く新しい「リベラル教育」のビジョンは、学習の個別の内

容ではなく、その学習の所産として各人が習得する一般的な「成果」（outcomes）にある。すなわち、新時代の「リベラル教育」の指標とは、①人文、社会、自然科学の考究に基づく人間と自然の世界についての広範な〈知識〉 knowledge、②分析的・批判的思考、コミュニケーション能力、情報リテラシー、チームワークと問題解決等に長けた〈知的・実用的スキル〉 intellectual and practical skills、③倫理観や道徳性、市民としての知識や活動力、生涯学習の基礎とスキルといった〈個人として、社会人としての責任性〉 personal and social responsibility、④以上の成果を新しい状況や問題に実際に適用する〈学習経験〉 integrative and applied learning、の4種類の「主要な学習成果」（essential learning outcomes）<sup>2</sup>である。21世紀のグローバルな経済社会で成功し、かつ知識と判断力を備えた有能な市民としての責任を全うする基盤は、これらによって整えられるというわけである。

AAC & U は、こうした一連の学習成果は、職業生活を直接支える特定の技能や専門性ではなく、人間共通の知力と人格性の多面的・永続的な活動であり、「リベラル教育」の目標にふさわしいと考えている。そしてそれが従来の「リベラル教育」、例えばリベラル

1 「〈リベラル教育〉の新展開——21世紀アメリカの大学改革構想」『京都学園大学総合研究所所報』第15号、2014年3月。

2 <http://www.aacu.org/leap/vision.cfm>

3 [http://www.aacu.org/leap/What\\_is\\_liberal\\_education.cfm](http://www.aacu.org/leap/What_is_liberal_education.cfm)

アーツ・カレッジの恵まれた環境で学ぶ、裕福な一握りの家庭の子弟たちの専有物ではないということを強調する。LEAPが推進する21世紀型リベラル教育は、選ばれた幸運な者だけのチャンスではない。しかもその舞台はもはや高等教育の枠をこえ、学校教育全体、つまり「すべての初等中等教育機関、コミュニティ・カレッジ（州立の短大）、そして大学で学ばれるあらゆる学習分野」での教育活動の中で、「漸進的に」進められるべきもの<sup>3</sup>、とされる。

「リベラル教育」の普遍化をそこまで徹底しようとする、その範囲はこれまでの普通教育や一般教育の「共通カリキュラム」の枠に止まらず、専門教育にまで及ぶことになる。大学での専攻学修（major）でも、あるいはコミュニティ・カレッジでの職業技術訓練であっても、それを学ぶ者に何らかの「リベラルな」学習成果、とりわけ職業生活・社会生活全般で有効な汎用的な技能や態度・志向性をもたらす契機となるよう期待されることになったのである。

そうした要請に応じて、職業上の狭い特殊な知識や技能をより一般的な文脈で生かすことができるような教育方法の工夫——例えば職業的な科目をサービス・ラーニングやボランティアなどの市民的体験と結びつける、あるいは専門教育と普通教育との間にカリキュラム上の関連を設けて両者の統合を図る、といった種々の取り組みが、LEAPとともに提案され、各地で実行に移されているという。リベラル教育と職業教育とを対立させる「因習的な知恵」はもはや無効となり、両者の統合が「21世紀を象徴する表現」となると、AAC & Uの機関誌（2004年冬季号）に、

ある私立大学の学長が記している<sup>4</sup>。

## 2. 今なぜ、ニューマンか

第15号の拙稿は、紙数の都合もあって、概ねこうした内容の報告で終わった。これに付け加えることがあるとすれば、AAC & Uは、光輝ある「リベラル教育」の旗印を掲げ通すための最善の道は、これまで対立関係にあった職業教育を取り込むことである、という思い切った戦術転換を決断したのではないか、との推測である。そうした方針の下で、「職業教育を通した」リベラル教育という表現も決して形容矛盾ではなく、新時代の「リベラル教育」の核心は、どのような種類の職業生活にとっても有効である汎用的なスキル・能力の涵養にあるという主張を声高に行なっているのでは、と。

事実、〈学習成果〉に照準を据えたLEAPの提言は、アメリカ本国だけでなく、広く海外に反響を呼んだ。わが国でも、今世紀初頭、高等教育政策に関する議論の中で、職業準備教育の充実を大学に促す声が政府や企業界から相次いで発せられたことは記憶に新しいところである。ただしそこでは、「主要な学習成果」といった〈翻訳語〉に代わって、「社会人基礎力」（経済産業省、2006年）あるいは「学士力」（中央教育審議会、2008年）といった和製の新語が使われていたが。

「リベラル教育」の歴史をささやかながら繙いてきた者には、いまやその本家となったアメリカが突き進んでいるモデル改造の動きは非常に興味深い。しかし、この運動自体の是非について拙速な評価をすることは控えるべきだろう。そこに認められるのは、果たし

4 B.Fong, Looking Forward: Liberal Education in the 21st Century, <http://www.aacu.org/liberaleducation/le-wi04/le-wi04feature1.cf> Fongによれば、「リベラル教育」の真義は「生涯、学習を絶やさぬ者」(lifelong learners)を育てることにある、とされる。

て当事者たちが自賛するような希望に満ちた「リベラル教育」の〈新次元〉なのか、それともやや極端な言い方をすれば、伝統が俗流に〈妥協〉し形骸化した姿なのか、慎重な検討を要する問題である。

ここでは、「リベラル教育」の変貌の意味を考える前段階の作業として、いささか迂遠ではあるが、正統とされる伝統的なモデルをもう一度確認しておきたい。大学における職業準備教育の系譜を探った小方直幸は、21世紀に入って台頭してきた〈学習成果〉を重視する大学教育の理念を「コンピテンスモデル」と命名し、それを伝統型と対照させながら考察を進めている。彼によれば、大学教育の伝統的モデルは、(中世の医学・法学・神学に始まる)「専門職モデル」、(リベラル教育に代表される)「教養<sup>5</sup>モデル」、そして(近代ドイツを中心に発展した学問的・科学的な)「探究モデル」、の3つに整理することができる<sup>6</sup>。そのうちの「教養モデル」の範型として小方が挙げているのが、19世紀イギリスの大学人であり神学者であったジョン・ヘンリー・ニューマン(John Henry Newman, 1801-90)の『大学の理念』The Idea of a University, 1852である。

小稿は、「リベラル教育」の古典と仰がれるこの著作の真髄に改めて触れようというささやかな試みである<sup>7</sup>。「科学と大衆の時代」がスタートした19世紀、産業化と民主化の

うねりの中で、大学教育の理想を永遠の相の下に語ったニューマンの論説は、その信仰心の篤さをも含めて、今日も参照基準となる価値を失ってはいないだろう。

### 3. 目的としての知性

ニューマンの生涯について詳述する余裕はない。1830年代から40年代にかけて、大学の宗教人たちが中心となり、世俗化した英国国教会を初期教会の精神に則って更新しようとしたオクスフォードの指導者の一人であった彼は、ついに国教会を離れてカトリックに転宗し、オクスフォードを去る。その後アイルランドのダブリンに新設(1851年)されたカトリック大学の初代総長に迎えられたニューマンが、就任の前後数回に亘って行なった講演をまとめたものが『大学の理念』である<sup>8</sup>。

以下、そこでなされた訴えの主要部分を点描していく。

大学は教育のための機関であり、研究や学問的発見は二義的なものにすぎない。知識の修得は大事だが、研究活動などは学生に無用である——ニューマンには揺るぎのない確信があり、当時影響を拡げつつあったドイツ的な「真理探究」のモデルも顧慮に値するものではなかった。「大学の本分(business)

5 “liberal education”は、以前はもっぱら「教養教育」と訳されていた。それが、〈教養〉という概念の多義性、曖昧さが問題になり、同時に「リベラル教育」の歴史と思想が欧米から詳しく紹介されるにつれて、訳語としては次第に使われなくなってきた。とはいえ、学問や知識を通して知性そのものを磨くところから始まるという点で、「リベラル教育」と「教養教育」は互いに重なりあうところ大といえよう。

6 小方直幸「大学における職業準備教育の系譜と行方——コンピテンスモデルのインパクト」広田照幸他編『シリーズ〈大学〉第5巻 教育する大学』岩波書店、2013年11月。61-70頁。

7 筆者はかつて不遜にも、この『大学の理念』の概説を作ろうとしたことがある。「教養教育と大学——J.H.ニューマンの自由教育論——」『京都学園大学経済学部論集』第3巻第2号、1993年12月。「リベラル教育」を「自由教育」と訳したあたりに、その論考の浅薄さが集約的に表れている。小稿はそれを改訂するためのメモ作りに過ぎない。

8 『大学で何を学ぶか』のタイトルで刊行された翻訳書(田中秀人訳、大修館書店、1983年)には、ピーター・ミルワード教授による詳しい人物紹介が附いている。なお、カトリック大学の試みは成功せず、ニューマンも短期間で総長職を退いている。そのあたりの簡略な記述は、猪木武徳『大学の反省』NTT出版、2009年4月。104-106頁。

は知的な教養 (intellectual culture) を直接の目的とすることであり、また知性の教育 (education of the intellect) に専心することであると私は信じるものです」<sup>9</sup>。

教育といっても、大学の役割は道徳的な成長や職業のための技術訓練ではない。教育とは、本来「精神の本性に対する働きかけや人格の形成といった、より高次のことば」であり、大学人の仕事を示すには「教授」(instruction) よりもふさわしい<sup>10</sup>。かくして、知識の「教授」を通して若者たちの知性を「教育」する「リベラル教育」こそ大学の本領、ということになる。こうした明快でストレートな言明がニューマンの特徴である。

さて目標となる知性の「完成状態」(perfect condition)、言い換えれば知性の完全な活動態は、「開放され是正され洗練された精神」、「知識を獲得し消化し支配統御して活用する力」、さらに〈勤勉さ〉、〈柔軟性〉、〈几帳面さ〉、〈的確な批判〉、〈賢明さ〉、〈機転〉、〈手際よさ〉、〈雄弁な表現力〉などの属性が渾然一体となった状態であり、身体における健康、道徳における善性と同じように、一つの「美」としか言い表しようがない<sup>11</sup>。このような人間知性の精妙さを神が恵んだ至高の「美」として観照するあたりに、中世を支配したアリストテレス哲学の影響が顕著である。

さらに、ニューマンによれば、知性が練り磨かれた結果もたらされる最も卓越した特性は、精神の「拡大 (enlargement)」にある。知性による知識の獲得、それはこれまで未知であった観念を受容することに他ならないが、重要なのは、その作用は受動的ではな

く、明らかな能動性——新しい観念をこれまで保持してきた思想や知識の枠組みと関連づけようと働く——をともなっているところである。

「多くの事がらを同時に一つの統一体として眺める力、それらの事がらを普遍的な体系の中でそれぞれ然るべき場所に位置づける力、それぞれの価値を理解し、相互の依存関係を決定する力——このような力こそが精神の真の拡大なのです。」<sup>12</sup>

知性の実質は、そのように知識を単に蓄積するのではなく、正しく受容し「消化」する、すなわち個別の知識に固有の意味を与えながら同時にそれらを一つの統一された全体のなかの、本来あるべき位置に的確に収めていく包括的な理解力にあるといえる。ニューマンにとっての知性とは、そうした秩序と調和のとれた世界像を生き生きと構成し、かつその深遠な実相を余すことなく眺望する、人間の魂の最も優れた機能なのである。

このような知性の完成、あるいは「知的な教養」を、ニューマンは端的に「哲学」あるいは「精神の哲学的な習慣」(philosophical habit of mind) ということばで説明する。ここでいう「哲学」はある客観的な学問体系のことではない。さまざまな学問的知識が一つの世界観の下に統合されて生まれる、清澄な理知的態度を指している。「拡大」され「洗練」されたその英知は、常に知識間の孤立や分離を許さない。哲学者の精神の内部では、「物質界・精神界のあらゆる要素が、すべて相関的な機能をもった一つのものとして、そ

9 Newman, *The Idea of a University*, Yale University Press, 1996, p.92.

10 *ibid.*, p.85.

11 *ibid.*, pp.90-91.

12 *ibid.*, p.99.

して次々と結合して徐々に真の中心へと収斂する一にして全なるもの」として捉えられているのである。

こうした洞察は、日々の生活でどのように生きるか。それは「多くの人びとの宿命である不安や懸念、動揺や迷信から超然たらしめるのです。……完成に向けて訓練されてきた知性、知りながら同時に考え、事実や出来事の濃密な塊りを理性のしなやかな力で発酵させる術を知っている、そのような知性は決して偏るはずがなく、排他的であったり性急であったり当惑したりすることもあり得ません。もっぱら忍耐強く、平然としていて、威厳をもった落ち着きを示すだけなのです。」<sup>13</sup>

#### 4. 「ジェントルマンを育てる」

そのような「哲学」にまで高められた知性には、〈自由〉〈公正〉〈冷静〉〈中庸〉〈叡知〉といった、日常の生活を堅実に、心のゆとりと安定を保ちながら営むことを可能にする諸々の徳性が附随する。ただしニューマンによれば、そうした美德はあくまで知性の枠内に止まるものであって、宗教的・道徳的な徳とは厳然と区別されるべきである。「哲学」は往々〈自尊心〉や〈自負〉に導かれた愚かな自己主張となる。知性はどれほど鍛えられようとも、神の前に跪き、己の罪の赦しを願う〈良心〉のひたむきさに及ぶものではない。

知性の完成は神の救いを約束するようなものではなく、したがって生の究極の目的とはなりえない。信仰の人であるニューマンはそのことをわきまえよと迫りながらも、同時に、人間の自然的な価値の発現である知性の向上をおろそかにせぬよう督励して止まな

い。なるほど知性は自己満足を追うがために徳の原理とはなり得ない。だがそれは、感覚的な欲求を退け、善悪を正しく判断する廉直さと罪や悪への強い嫌悪感を養い育てることで、われわれの自律を過ちから護る堅固な防波堤の役割を果たすというのである。

知性が育むこのような人格性を、ニューマンは理想的な英国紳士、すなわち「ジェントルマン」(gentleman)の姿に形象化してみせた。「決して苦痛を与えない人というならば、ほぼジェントルマンの定義になるでしょう」というよく知られた一節に始まる、彼のある講演(「宗教との関係からみた知識」1852年)の締め括りは、この英国固有の文化理想の謎をユーモアと巧みなレトリックとともに解き明かした傑作といわれ、これまで広く引用されてきた。紙幅が尽きてきたので、この味わい深い人間像の一部のみ紹介する。

「真のジェントルマンは、自分が交わらねばならぬ人びとの心に、衝撃や動揺を引き起こすような一切のこと——意見の衝突、感情の軋轢、気兼ね、疑惑、憂鬱、憤りなどを、みな注意深く避けます。彼の大きな関心事は、すべての人をくつろがせることだからです。彼は自分の仲間の誰からも眼を離しません。はにかむ人には優しく、よそよそしい人には物静かに、愚かしい人には慈悲深く振舞います。……彼は強いられぬ限り、決して自分のことを語りません、単なる仕返しのために自分を弁護することも決してありません。中傷や噂話には耳を貸さず、自分に干渉する者の動機をみだりに速断することもせず、あらゆることを最善に解釈します。……彼は良識に恵まれているので侮辱に晒されることはありませんし、かつての誹謗を覚えて

13 *ibid.*, p.100.

いるほど暇でもなく、人に恨みを抱くほどあくせくしていません。彼は哲学の原理に従って忍耐があり、辛抱強く、しかも諦めを知っているのです。苦痛は避けがたいものである以上、これに耐え、死別は如何ともし難いので、これを受け入れ、自分の死も宿命であるならば、それに安んずるのです。……彼は単純ではあっても同時に力強く、簡潔で果敢でもあります。彼以上の淡白さ、思慮、寛大さは、どこを探しても見つけることはできないでしょう。彼は相手の心に身を置き、彼らの誤りの責任を負うのです。彼は人間の理性の強さを知っていますが、同時にその弱さもわきまえており、その領分と限界を知っているのです。]<sup>14</sup>

理知と品性のこうした結合は、「世俗の理想美」(beau-ideal of the world) とニューマン自身が称えるような魅力に満ちている。真摯だが窮屈ではなく、正義よりは良識を重んじる寛容と自制の人——「ジェントルマンであること」は、あくまで地上の、つまり「文明の産物」に過ぎないとしても、やはり「結構なこと」なのである。こうして、かつては専ら社会経済史の範疇で、土地に根付いた英国型支配階級を指していた「ジェントルマン」]<sup>15</sup> は、ニューマン以後、普遍的な人間理想の一典型として、世界に広く受け入れられていったのである。

## 5. リベラル教育の精神

「リベラル教育は、キリスト教徒でもカトリック信者でもなく、ジェントルマンを育てるのです。]<sup>16</sup> ニューマンは、「大学およびジェ

ントルマンの徴表 (especial characteristic) ないし特質 (property) がリベラル教育であると力強く語る<sup>17</sup>。彼が理想とする知性は、「リベラルな知識」、「リベラルな学術」を介して養われるのである。

「リベラル」とは古代ギリシア・ローマ以来、自由人の属性を示す語である。自由人の知識は、「奴隷的な」(servile) 知識と相対立する。自由人の知と奴隷人の知の差異は、精神的なものとの肉体的な(労働に関わる)ものの違いではなく、自立性の有る無しに関わっている。ニューマンはその点で厳密だった。

知性の自然な、つまり本性的で自己充足的な活動の所産——それが「リベラルな知識」である。何か外からの力によって吹き込まれ、促され、奉仕させられ、結果を求められる、といった従属的、追従的な背景がなく、秩序ある世界像を照らし出そうとする直向きな真理探究の成果として、「ただわれわれの観想 (contemplation) の対象としてのみ妥当であるような」知識である。たとえ神学の研鑽を積んでも、それが説教に利用するためであれば「奴隷化」された営みとなってしまう、ニューマンが「哲学」と呼ぶあの精神の広潤さと活力は生まれえない。

知識の有用性には種々の段階がある。実用的なもの、技術的なものはもちろんわれわれの日常生活を支える重要な役割をするし、そのことは正當に評価されるべきである。しかしはるかに高次の有用性を備えているのが「リベラルな知識」であり、その効用は人間の知性を「全般に亘って」(generally) 訓練するところにある。専門教育や職業教育の有用性とは全く質の異なる有用性を、「リベラ

14 *ibid.*, pp.145-146.

15 そうした歴史的研究においてはわが国も成果を上げている。例えば、村岡健次・鈴木利章・川北稔編『ジェントルマン—その周辺とイギリス近代』ミネルヴァ書房、1987年7月。

16 Newman, *The Idea of a University*, p.89.

17 *ibid.*, p.80.

ル教育」は満たしているのである<sup>18</sup>。

さて、それでは、どのような学問が大学で講じられるべきか。

ニューマンが参画したカトリック大学の当初の構想では、教養課程にあたる学芸学部 (Faculty of Arts) と医学、法律、神学の専門職養成課程3学部とが設置されるはずであった。この構成は中世の大学の典型に従っているが、注目すべきは、「リベラル教育」の拠点であるべき学芸学部が人文学 (Letters) と科学 (Science) の2学科を保有する計画であった点である。語学、文学、歴史の諸学の古代からの成果を集めた前者は当然であるが、後者では、宗教哲学をふくむ哲学分野の諸学の他に、政治学、経済学、数学、物理学、化学、生物学、鉱物学、地理学と、幅広い科目が講じられることになっていた<sup>19</sup>。

こうした構想は、ニューマンの考える「普遍的な知識」 (universal knowledge) のあり方から生まれている。大学は「知識のあらゆる部門」 (all branches of knowledge) を教えることによって、およそ「知識というもののすべて」 (all knowledge) を教えるのだ<sup>20</sup>というあたりに、彼の神学的世界観に基づいた教育思想の枠組みがよく現れている。この世界について人が知ることのすべてが宇宙を主宰する「創造主の御業」である以上、諸々の知識も本質的に「一つの全体」 (one whole) を成しているはずである。その全体のどの部分も、神の観想という至高の理念の下に緊密に統一され、包括的・調和的な知の世界を構成しているのであって、「リベラル教育」は、

そうした神の広大な知を反映する「普遍的な知識」に若者を引き入れ、知性の真価というべきあの「精神の哲学的な習慣」へと彼らを導かなければならない。その入口となる教科目の範囲を広げることは、したがって大変重要なことなのである。

「開講科目の全部を履修することはできなくとも、学生たちは学問の全領域を代表する人々の間で、その指導を受けて暮らすことによって何かを得るでありましょう。このことが、教育の場として考えた場合の、普遍的な学問の府 (a seat of universal learning) の利点であると私は考えます。……学生は知識の大いなる輪郭を、知識の基本原則を、知識の各部門の規模を、その光と影を、その重要な箇所とそうでない箇所とを理解するのですが、こうしたものは別の方法では理解できないものなのです。学生の教育が《リベラル》と呼ばれる理由はここにありません。」<sup>21</sup>

## 6. むすびとして

おそらく、1世紀半以上の時を隔てた今日、ニューマンの論考が全面的に支持されることはないだろう。何よりも、それを産んだ背景が異なっている。彼の人生のほとんどすべてであった大学——大衆とはまだ縁遠く、ほんの僅かなエリートの師弟がゆったりとした自然環境の中で生活を共にし、全人格的な交流の中で互いに刺激しあひ学びあう密度の高い教育的空間——も彼の時代には産業化とデモクラシーの進行する近代化の波に洗わ

18 *ibid.*, pp.81-82.

19 F. McGrath, *The Consecration of Learning — Lectures on Newman's "Idea of a University"*, Fordham University Press, New York, 1962. pp.199 - 200. ニューマンが、当時まだ少なくなかった古典一辺倒の頑迷な人文主義者の一人ではなかったことは明らかである。

20 Newman, *The Idea of a University*, p.118.

21 *ibid.*, p.77.

れ、もはや浮世離れした「象牙の塔」ではありえなくなっていた。社会全体の利益に寄与すべく、富と力を産む新しい知識や技術を発見し開発する専門家集団＝「知の経営体」へ向かう道を、大学はすでに歩み出していた。さらに一方では、大学と教会の安定した永続的な関係は終わりを告げ、人間と自然の諸事象を、神による永遠の真理の開示ではなく、生成と変化のあるがままの姿で捉えようとする科学的・相対的な世界観が支配的になりつつあった。ニューマンは、人間の豊かな精神性を特定の職業的スキルや専門分野に閉じ込め、経済社会の発展の歯車として効率的に訓練し活用しようとする時代の風潮に抗して、あえて「知の共同体」としての大学、すなわち功利主義に侵されない人間教育の聖域という理念を護ろうとしたのである。

時代遅れの、非能率的な教育観としてニューマンを退けることはたやすい。しかし教育は、多面的な価値の実現をふくむ複合的要素をもった人間の営みである。社会の機能に適應する「人材」としての価値がすべてではなく、豊かな資質や能力がバランスよく調和的に育った「全人」という価値を万人に追い求めることも、教育の譲ることのできない目的であることを忘れてはならない。「リベラル教育」は、そのように人間を手段ではなく目的と考える教育観の典型として、永遠の生命を持ち続けるのではないだろうか。そのような観点から、改めて今世紀のアメリカ教育の動向を検討してみたい（了）